

書 評

栢森良二 著

サリドマイド物語

蜂須賀研二（産業医科大学リハビリテーション医学教室）

フォコメリアはサリドマイド胎芽病の一つである。西ドイツのレンツが1961年11月に最初にサリドマイド服用との関連を「警告」し、さらに、豪州のマクブライドが催奇形性の最初の英語の報告をした。1961年11月27日に西ドイツではサリドマイドの販売中止と回収を開始したが、わが国では1962年9月に回収に踏み切ったものの、完了したのは1963年末頃であった。そのためわが国ではドイツに次いで世界で二番目に多くサリドマイド胎芽病患者を生んでしまった。さらに残念なことに、この教訓をHIV感染防止に役立てることはできなかった……と、栢森良二氏は「サリドマイド物語」のなかで述べている。

著者はリハビリテーション医学の専門医であり、電気生理学のエキスパートとして有名であるが、サリドマイド胎芽病の専門家であることは案外知られていない。帝京大学医学部の有志で、長年、全国のサリドマイド児の健康管理を行っており、著者もその主要なメンバーである。この本には、サリドマイド胎芽病の発生、原因が確立するまでの論争の経過、回避できた症例、レンツとマクブライドのその後の

明暗などが物語風に書かれている。専門用語には注が付けられ、図表も理解を助けており、全体として分かりやすく読みやすく仕上げられている。さらに、サリドマイド胎芽病の障害像やその治療法、成人になり生じる諸問題についても言及しており、疾病または薬害という狭い立場からではなく、より包括的で全人間的な視点で診療に取り組んでいることが伝わってくる。

薬害に関する出版物では、患者の悲惨な状況、製薬会社の冷酷な態度、厚生省の無策ぶりを指摘するのが定番であろう。しかし、本書は科学者の目から見た事実を物語風に淡々と伝えており、そのためより説得力を増しているように思える。また、科学的真実を裁判で善悪として争うこと、サリドマイドは「悪魔の薬」であり「福音の薬」でもあること、など重要な論点を指摘している。

この「サリドマイド物語」は医療関係者には科学とは何かを再考させ、一般の人々にはサリドマイド胎芽病や障害者への理解を深めるのに良い本であり、是非一読することを勧める。

（A 5 頁 246 2,300円＋税 1997 医歯薬出版刊）